

小山田郷土読本

山田町 竹内雅彰編

目次

一 小山田村

二 夕立

三 西瓜

四 川

五 小山田城址

六 岡山

七 不動の滝

八 村役場

九 平野新田

十 小山田尋常高等小学校

十一 表忠碑

十二 矢田監物

十三 鎌田松石

十四 花祭り

十五 郷土の歌

子守唄 茶摘み歌 田植え歌 臼すり歌  
盆おどりの歌 お伊勢まいり

あとがき

## 小山田郷土読本稿本

### 一 小山田村

明治天皇御製・小山田のさとのけぶりも年々にたちそう世こそ楽しけれ

小山田というのは田舎というわけであるが、我等の郷土小山田村はその名にもふさわしく平和に、健やかに年々発展してきました。

今では戸数七百余、人口三千四百余の大きな村になって、小山、山田、西山、内山、六名、堂ヶ山の六区に分かれています。東は内部村、四郷村、西は水沢村、南は鈴鹿郡久間田村、北は桜村、川島村と隣あっていますが、四日市へは三里ばかり隔たっています。

私どもの村は随分山の中で、不便であるが、然し私どもにとっては他に二つとない郷土なのです。小山田村民の母の地なのです。村里は林に包まれ、岡に囲まれ、川の流れに沿いなど、互いに隔たれていても各字とも等しく働くに充分な田と畑、そして山林とを持っています。そうして村民は田を植え、蚕を飼い、薪を取り生活には何一つ不自由なく暮らすことが出来ます。

私どもはこうした静かな、平和な土地に住み慣れて、朝は丘の上に太陽を迎え、昼は等しく鈴鹿の山脈を仰ぎ、夕べには夕陽をその後ろに送って一日の感謝を捧げます。殊に西に望む高峰鎌ヶ岳や野登山は春夏秋冬四季を通じて、私どもの慰安であり、又気象台というべきものでしょう。春雨にも夕立にも秋晴れにも雪にも言い知れぬ懐かしさと心安さを与えてくれます。鎌岳が雲にかくれたといつては夕立を案じ、野登から起こった雷は恐ろしいといい、山が時雨しだしたといつては初薙を収め、全く山をたよりの農業にいそしむのです。

然し、一方考えて、こうした平和なうちに、我どもの祖先や先輩はこの小山田を盛んにするために非常な努力をしてこられました。農業を盛んにして養蚕業、製茶業等は県下でも名高く、近年は米、麦の他西瓜、瓜等の栽培も盛んになって多く大都市へ移出されています。なお、この上色々の副業にも注意されつつあります。

道路も四日市道が大体出来上がり、引き続いて堂ヶ山、西山、六名方面のも着々計画を進められており、また近くは電話も新しく設けられて、村は生氣に溢れています。

丁度今、経済更生の旗をかかげて小山田村の発展に村民一体、努力していられる時、私どもも共に力を合せ励まなければなりません。

## 二 夕立

七月二十七日、午後五時、蒸し暑い。雨は時々ぱらぱらとこぼれてくる。南の方は非常に暗い。雷がごろごろ聞こえてくる。南の方は随分降っていることだろう。雲は見る見る広がって西は野登山をおおいにかくした。書斎の窓辺の青葉がざわめいていて、一層ものすごい。いよいよ一雨来そうだ。

母が田圃から急ぎ帰ってくる。ぴかっ！ぱりっ！ごろごろごろ。いよいよきた。たちまち篠つく大雨である。

カンナの高い花が立っている。向日葵は首を垂れている。僕は早速着物を脱ぎ、パンツ一つで、降りしきる雨中にとびだした。ピシピシピシ、大粒の雨は頭を打つ、肩を打つ、腕をうつ。余り慌てて腕時計をはめていた。手にも足にも皺が出来て、身体中は忽鳥肌となる。僕はかつて軍艦扶桑に乗り組んでいた時、上官が南洋方面では一日に必ず一度は非常な大夕立が来る。軍艦ではこれを待ち受けていて、号令いっか、真裸になった水兵達は何でに石鹼と手拭を持って甲板へと飛び出して、思う存分熱帯の暑さを洗い流すのだ。雨は間もなく止んでしまうが、中にはまだ身体中真っ白に石鹼の泡をつけて立っている連中もいる。」と愉快そうに話されたことを思い出していた。

僕の身体の回りには大地にぶつかる雨が跳ね返ってくる。約五分雨はやや小降りになった。頭から濡れ鼠、パンツもびしょ濡れだ。樋の口からあふれ出る雨水に足を洗って縁側に立つ。雨はやんだ。涼しい風が吹いてよい心持だ。

## 三 西瓜

今日から夏休みが始まるのである。朝のうちに学習帳の記入も終えて、午前中は屋敷まわりの雑草をとる。昼飯をすまして家の者が昼休みをしている暇に蟬をとったり、川遊びしたりするのも面白いが、今日は西瓜の出荷をする日である。だから僕は西瓜畑へ行って調べて来なければならない。家中で暑いからといって止めるのも聞かずに麦藁帽子をかぶって家を出た。早速畑へ来て見ると丁度摘果師が来ていてちぎってくれている。僕はませた口ぶりで「暑いのにご苦労さん」といいながら進み寄った。

摘果師は良さそうな西瓜を一つ一つ鉢を入れてそれを返しては進んでいく。僕も手伝いながら一体どんなのをちぎるのだろうと考えてみた。中には如何にも大きくて充分実の入ったらしいのでも切らずに行く。一つ一つとられてゆく西瓜をたたいてみたり、裏返してみたりして考えてみたがはつきりとは分らない。

真夏の太陽は真上に輝いてじりじりと照りつける。むっと草いきれがする。一つ一つ丹念に調べて行かねばならぬ摘果師の仕事もなかなか苦痛なものである。裏返された西瓜は白い、いや、やや黄色い尻を見せて、いかにもつやつやして、はりきった肌を日にさらしている。今日は二回目であるが第一回の時よりも大分に多かった。後で数えてみると四十七。

その上、今日の西瓜は皆一寸大きい。とても荷車一台では出せないだろう。何処もこんなにも沢山ちぎられるのだと、今日の出荷組合へはたくさん集まることだろう。

## 四川

小山田村を流れている川は鎌谷川、足見川、天白川、内部川である。内部川は堂ヶ山、六名と鈴鹿郡久間田村の境界を流れている川である。鎌谷川、足見川は内部村で内部川に合流しているのであるから、内部川の支流と言ってもよい川である。

天白川だけが小山の井戸ノ窪に源を発して内山を過ぎ四郷を過ぎて四日市港へ出ている。

これらの川は小山田村の田地を灌漑して村の富を増してくれるのである。どの川も流れは余り豊でないが、水が不足して水喧嘩が起こるというようなことは無く、村は至って平和に暮らして行ける。

川は曲折して流れているが、早瀬があり、淵がありして釣りもできるし、泳ぎも出来る。夏は子供の天下である。子供の世界は川である。夏休みの一日、朝も早くから瓶を持って川へ出かけ、そここの魚のよく集まりそうな所を見計らって瓶をかけ、大きな魚小さな魚が集まって来るのを待つも楽しみなものである。こうして僕らは夏の間、川とは仲良しになって知らず知らずの間に忘れられない印象を与えられてしまうのである。

大人になっても僕らはやはり小山田の子である。川と言えば直ぐ子供の時に遊んだ川、釣りをした川が目に見えなくなるのである。釣竿を肩に、手にはバケツか何かを下げて出かけた川が思い出されるのである。

その川の岸には女竹や葛がいつぱいに茂っている。そのはびこった葛の葉の間からは紫の花がこぼれ落ちて、いくつも水に浮いている。そこへ釣り糸を垂れる。友達と出かけるのもよいが一人で釣るのもまたよい。小さい諸子がかかったり、鮒がかかったり、たまには大きな鯰がかかったりする。こんな時には嬉しくて、竹谷のどんぼりは大きな鯰がよくつれる、昨日釣ったのは一尺位あった。」などと学校へ来てよく言いふらしたものである。然し、そういうも都合よく釣れるばかりではない。

どんどんと歩き回って、やっと小さなむつが二三匹、心細くなってくる。それでもほっと気がついて振り返ってみると人家も見えねば人声も聞こえて来ない。

あたりは崖も相当に高く森も静かで、耳を澄ませば流れの音が二層物寂しく聞こえてくる。もう堪らなくなつて一目散駆け出すこともあった。

こんなことを考えていると、その川が鎌谷川という名であったことも、鎌ヶ岳の裾野から流れて来ていることも、内部川に合流して伊勢湾へ注いでいるということも、小山田村にはまだこの他に足見川、天白川等の川があったことも知らずに遊びまわった幼い時のことが何とはなしに懐かしくなってくる。

## 五 小山田城址

お屋敷跡だ。あそこには昔矢田監物の城があったの。」と子供の時に聞いた話は今でも忘れない。その時分、そこにへべの木の実を取りに行った事などもよく覚えていて。そこには監物の妻の石塔があるのだそうだが、そんなものの記憶は更にのこっていない。唯そのへべの木という名がおかしかったのと、その木の実で笛をこしらえてびいびいと鳴らした事だけがはっきりと思い出される。

ところがそれから十年になるか十五年になるのか、その後は不思議にも一度もそこへ行って見た事がなかった。ところが今日、石塔があるだろうか、あのへーべの木はどんなになっただろうと思って行って見た。以前も桑畑であったその木のはたはちよつとの空地になっていた。その後その屋敷に家が建ったということは聞いていたが、屋根の上からでも見える筈のへべの木が見えない。家の西側に廻ってみると、その直ぐ軒の下に古い株からだったのであらうと思われる、所謂へべの木が屋根ぐらいの高さに伸びて二本出ている。

なるほどその根元に五輪塔が並んでいる。身体をかがめて、家とそのはびこった木との間を覗いてみると六つ並んでいる。然し満足に五つ重なつて五輪塔の形をしているのは唯一つで、他のは、三つか四つしか重なつて居ない。笠の部分の如意珠だけが据えてあるものがある。

あまりのあつけなさに、しばらく立ち去ることが出来なかった。

付いて来た子供がこんな地藏さんを見て何をするのだろうと不思議がつている。「いや、ここは矢田監物の城が会った所で、これが監物の妻の墓だ。」という和尚更不思議がつて、こんな所に城があったんだろうかと首をひねっていた。

へーべの木の繁り合った、細い葉の間には青い実がたくさんついている。子供の時取りにきたのはもっと赤く熟れてびよびよと軟らかで中を押すと硬い実が出て来たのであったが、まだ硬そうだ。

どうやら、いぬがやの木に良く似ている。へーべの木という位だからひよつとするとこれは平兵衛という人でも植えたのかも知れない。近頃そう考えていたのであるが、兎に角その一枚を持って帰って調べて見ることにした。

早速、植物図鑑を出して念のためいぬがやを引いて見た。葉も実もよく似ている。何処も違わない。読んで見ると、「名へぼがやと称し」と書いてある。なるほどこれで分かった。

へぼがやをへぼがやといい、かやを抜かしへべと言ったのに違いない。

因みに、小山田城址は現村長青山新兵衛氏の東の桑畑がそれだと言われている

## 六 岡山

岡山へ登る。茶畑の間の道に猫がひょいと首を上げてこちらを見た。僕が歩いて行くと一目散に頂上の方へ走って、直ぐ見えなくなった。涼しい風が吹き上がって来る。振り返ってみると山田の屋並が左へ折れる。また、ひょいと猫が頭を上げて後向いて立っている。顔を見たので、また逃げ出した。ずんずん上がって行く。上は割合に広くて中々立派な茶園になっている。東側の岡の中腹では二三人の人が草を取っているのか、かがんでいるのが見える。猫は道をそれて、茶の畝の間からまだこつちを覗いている。今、この直ぐ下に見える暁覚寺が昔はここに建って居たんだそうだが、今もここに建っておればどんなだろう。随分夏でも涼しいことだろうが、こう考えながら山を下りた。

## 七 不動の滝

前から西山には不動の滝という滝があるのだというのは聞いて知っていた。またある本でもその不動の滝のことを書いたのを読んだこともあった。しかし実際そこへ行って見たのは今日が初めてである。歩きながらも滝と言っても、滝らしい滝ではあるまい。水も牛の尾位で、高くても一間位で低いのだろう。」と考え続けていた。西山の東の端で南向いて藪の方へ坂道を下りて行くと、下に川が流れている。これは鎌谷川の上流で、この川を向山へ渡ってなお五六丁も山を登らなければならないのだそう。

田の草取りの人達は頭を上げて浴衣がけの僕らを眺める。畦にはその人達の草履が四足並べてぬいでいる。道の横の、林の中の木には昼弁当であろうと思われる風呂敷づつみがぶら下げてある。僕は ああして置けば蟻が寄らないからだろう。」と思った。

山といっても道は手垣で歩くのに少しも難儀は無い。その上、道の草は美しく刈られている。林には最早、桔梗が咲いているのが見える。まだ蝸も鳴かないから道は静かである。僕らはまだ見ぬ滝のことを色々話しながら歩いた。

滝の落ちる音らしい響きが聞こえて来る。滝不動の堂が見えた。思ったより大きな堂でまだ建てたばかりのようだ。滝は堂の直ぐ下でそこからもよく見える。駆け下りて滝壺へ行くと水はよく澄んで底がよく見える。ふと見ると水の底に亀がいる。大きな亀だ。

「こんな所に亀が」といってかがみ寄ると亀は慌てて深い所へ逃げていく。その後には蟬が沈んでいるのが見える。亀は水に落ちた蟬を今まで食べていたのであろう。澄み切った水底には亀の甲羅が見えている。

山の間から湧き出てくる水は涼しい滝風を起こしながら落ち続けている。帰りにも僕らはまた滝のことを色々話しながら歩いた。その話の中には 四日市方面の人が、あの滝不動へ願を架けに来たり、また冬の寒い時にも滝に打たれて苦行をする人もあるそう。

なるほど不動さんはそんなに御利益があらたかなんですかなあ。と言うようなことも混じっていた。

## 八 村役場

昔幕末の頃までは小山、山田、堂ヶ山、六名の各村に庄屋があつて村治を司っていたが、明治維新後各旧藩主は藩知事になると同時に庄屋は里正というようになった。明治四年七月藩を廃して県が置かれ、翌五年には町村の庄屋は廃せられ戸長、副戸長が置かれるようになった。後明治十二年に郡が置かれ、明治二十二年四月市町村制が実施され、村長が置かれるまで、戸長、副戸長の制度が続いたのである。この時には山田、小山、堂ヶ山、六名の各村を合して小山田村と改め、村役場を山田区の中央、現今の山田区会議所に置いたのである。ところが明治四十三年四月になつて、学校移転後旧校舎の一部を改修してここへ移転したのである

では役場ではどういう方がどんな仕事をしているのかといえ、村長、助役、収入役、書記の人達がそれぞれ各自受け持ちの仕事をしておられるのである。受け持ちの仕事と言うのは普通に庶務、戸籍、兵事、学務、勸業、税務、会計等の係りである。

## 九 平野新田

昔、知慧出豆松平信綱は安松金衛門に命じて野火止の用水六里の堀を掘らせたと言うが、我が小山田村にもこれによく似た話がある。西山の東、一帯の所は見渡せば今は青々とした一面の稲田である。この割合に土地が高く、豊かな田畑を持つ一帯の平地を平野新田と言っている。この平野新田には人家もあり、茶園もあり、桑園もあるが、大部分は田地で、西山の農業は主としてこの平野新田で行われると言つてよい。

その平野新田を湿らせ、なお余りあるという用水は人家の間を流れ流れて来るもので、源は遠く西山の西方、林中の大沢の大池である。

元来、西山の地一帯は山田の一部分ではあるが、林勝ちで人家も無く、土地高く、水利に欠け、土やせて、見るから貧しい原野であつた。

今より約二百五十年前、京都の平野清左衛門という人がこの地に来て、先ず二町五反の大池を築き、原野を開墾して平野新田を開いた。

池との間には約半里にも互し長い堀を掘つて水を引き、水田としたのである。その後山田の農民がここに移住して、今日の西山が出来たのであると言われている。

こうして、毎夏どんな日照が続いても池の水が涸れることはなく、水は用水にあふれて、田はよく茂り、年毎の豊作を喜ぶことが出来る。

今もなお西山の村民の間には、当時の苦心をしのび、功績を讃える美談として、平野清左衛門の名が言い伝えられている。

用水は人家の間を流れては、良き洗い場となるのであるが、このように目に見える事ばかり



りではない。草は秀で、作物は良く成長する。殊に平野新田とは方角違いの鎌谷川の水が涸れてしまっても、小割畑(鎌谷川流域)でもこの用水に水がある間は決して田は乾かない。もし用水に水が無くなればこれらの田んぼはすぐ乾上ってしまうのである。用水から僅かに漏れたたり、また地中にしみ込んでゆく水がこれらの田を潤すのであろうと言われている。

#### 十 小山田尋常高等小学校

私どもの学校は明治八年に、はじめて生まれました。それまでは寺子屋と言って主に読書、算を習っていたのですが、名前も山田学校、小山学校、堂ヶ山学校と言うようになりました。当時は下等小学の教科を授け、修業年度は四箇年でした。その後、明治十三年三月更に七箇年と改められ、明治十五年八月には六箇年となり、明治二十三年にはこれを短縮して三箇年とし、山田簡易授業所、小山簡易授業所と改め、堂ヶ山校は山田簡易授業所の分教場となりました。そしてその時菰野村に設立せられた高等小学校の組合に入ったのです。

明治二十四年七月には各々小山、山田尋常小学校と改称され、修業年限はまた四箇年となりました。同年九月、山田尋常小学校は山田の西端、現在の村役場及び駐在所の地に新築の校舎に移り、大いに面目を新たにしました。その後二年して尚一棟を増築し、堂ヶ山分教場を廃止しました。この時設置された補習科は明治三十三年四月に廃せられ、さらに菰野村他九箇村小学校組合高等小学校の分教場を置くことになりました。これもその翌年四月には廃せられ、小山、山田の二校は合わされて、同時に高等科を設置し小山田尋常高等小学校と改称し、五月五日之が開校式を挙げました。

それより五月五日を本校の開校記念日としております。

明治四十一年四月一日より義務年限を六ヶ年に延長せられるようになって、校舎狹隘のため、校地を買収して新築、移転の議を決し同年十月工を起し明治四十三年三月今の学校が竣工しました。同時に御真影、奉安殿も竣成して当時としては非常に立派な学校となりました。

現在の一番南と中の校舎がそれなのです。尚その後大正九年三月に校舎一棟（＝教室）、昭和二年三月にはかねて熱望してやまなかった大講堂、近くは昭和七年七月五日校舎一棟（西教室）が増築せられて誇るべき立派な学校となりました。その間には学校の敷地も拡張せられ、先生も十四名、児童六百名、年々増加してゆくばかりです。

これが私等の学校です。

僕らの学校には僕ら日本男児の好きな手本として輝かしい功績を残して潔く戦死あるいは病死された人々を記念するための表忠碑が建っている。

しづれ石を積み重ねた台座の上の大きな一枚石の碑面には達筆で表忠碑の三字と元帥公爵大山巖書の一行とが刻まれている。裏へまわって見ると西南役、日清役、日露役での戦病者名が刻まれている。この表忠碑が創めて建てられたのは大正十年、丁度僕が六年生のころだった。

今その当時の様子を思い出すままに書いてみることにしよう。

昨日は小山組、今日は山田組、明日は堂ヶ山組というように、何台もの車が毎日椿村方面から石を運んで帰った。そして間もなくこの校門の前は右も左も沢山な石が並べられた。

その時分 いよいよ学校へ表忠碑が建つことに決ったそうなの」と言うことを聞いた。この石運びはなかなか難儀なことで、一台の車に一つの石がやっとなつづつのせられてきて、また難儀をして降ろされた。こうして土台が築かれ、石が積まれ、土が運ばれてその上に表忠碑が立つようになった。

僕らは鐘が鳴って外へ出て行くと、太い木を組んで、小さな万力の力でじりじり上げられて行く大きな石碑を不思議そうにじつと見つめていたものだ。

出来上がった表忠碑には白い布がかけられた。やがてその除幕式もすんだ。その後、積み石の間にはさつきや椿や、一つ葉や、著莪や、しだ類やその他いろいろのものが植えられて四季折々の花が咲く。殊に春になると表忠碑を埋め尽くして咲く櫻花こそ武人の誇りにも似ていかにもふさわしい眺めである。

僕らは風の日も雨の日も花の日も登校下校の際には在りし日の勇士の面影をしのび護国の鬼となられた軍人の英霊にしばし黙祷を捧げるのである。

## 十二 矢田監物

小山田村には矢田監物が居城を築いていたことは口碑にも伝えられ、その城跡と言う所もお屋敷跡といって今も監物の妻の墓と伝えられる五輪塔と古木が存してはいるが詳しいことは分からない。この事を暁覺寺住職中沢見明さんにお尋ねすると次のように語られます。

加富神社記に記されているように、監物某は丹波の人、室町十代將軍足利義晴の臣であった。下は上をたしなみ、家来は主君に叛くという下克上の乱世にあつて、一人足利義晴に最後まで忠節をばげんだのはこの監物であった。家臣のため京都を追われ、義晴に従つて近江に奔り、天文十九年五月四日近江穴太山中に於いて主君義晴の薨去に会い、つづさにこの世の無常と人情の果敢なさを感じた。その後は京都へも上がらず、丹波にも帰らず、他の主に仕官することも無く、義晴の菩提を弔いつつ、各地に放浪し、終に小山田村に来たのである。郷民はこの人格者を迎えてこの郷の押領司とした。先ず小山田城を築いて居城と定めたのである。そして長年の希望であつた主君義晴の祭祀のため、萬松寺を建立し、その靈碑即ち萬松院殿の尊儀を安置し、十一面觀音の木造を本尊となし、山号を長谷山と称し、同時に自家の菩提寺と定めたのである。」

当村に萬松寺、觀音谷という地名の今尚残っているのはそれらの遺跡である。その後の矢田氏は二三代の間、小山田に居城して約四十年間在住していたのであろう。そして代々矢田監物というとのことであるが、後の監物喜太郎の時天正十一年正月滝川一益に破られ、相従う諸士七十余人と共に退散したと言う。この年豊臣秀吉が滝川一益征伐のため大兵を率いて伊勢に入り諸道より一益を攻めたのであるから、先に一益に破られた監物等は喜んで秀吉軍に参加し、その後も秀吉に随従していたのであろうか。天正十八年相模小田原において戦死したと言われているのは、秀吉の小田原征伐の時に従軍戦死したのであろう。

現在小山田村に矢田の姓が多いのもこの矢田氏が久しく居城したという関係から、村民の大部分が、後世矢田の姓を称するようになったのであろう。

因みに、矢田監物の碑は山田西さんまいに現存し、庄屋平尾四郎兵衛政国の建てたものである。

### 十三 鎌井松石

君は三重郡小山田村の人にして医を以って正業とする。性磊落にして家事を管せず。中年にして本草学を嗜み、勝地旧跡の探検を好む。故に毎年春夏の交には植物採取のために山間幽谷を跋涉し秋冬の交には旧跡名地等を実地に踏査し、その来歴を究めるを以って事とする。かくすること殆ど四十余年研究上の疑問はこれを伊藤圭介、山本亡羊、飯沼慾齋等の諸氏に質し、種根を丹波修治、岡田正堅等と交換し百万研究して以って自ら樂あり。

その図記する所少しとせず。今その主なるものを挙げれば伊勢風土記、三重博物誌、本草正訛、千草啓蒙、九重雜誌等なり。

晩年中風症に罹り、復研鑽の業に従う能はざるを以って編集の九重雜誌はこれを三重郡役所に納め 当時親友伊東祐賢氏本部に宰たるを以ってなり）その他三重博物誌十六卷、本草正訛三十二卷、千草啓蒙六帳はその筋の命によりて文部省に収めたり。時に明治十六年十一月なり。これらは皆君が多年研究の結果にして学术界に裨益する所斟からざるを以って翌十七年一月、時の文部卿福岡孝悌氏より賞詞を賜り之に添えて賞勲局より銀杯一個を下賜せらる。

爾来宿痼益々進み遂に明治二十四年十一月を以って没せり。享年七十七。家に男三子あり、兄を勇治郎という。別居して医を営む。次を留之助という。多年小学教育に従事せしが明治四十四年二月病みて没す。季を軋の丞という。別居して農桑を事とする。共に小山田村に住す。君の官命によりて調査に従事したること左の如し。

明治五年四月 澳国博覧会に付緒物品取集御用取扱申し付けられる（三重県）

同年十一月 文部省に於いて地誌編纂に付三重県内取調を囑託せらる（文部省）

六年二月 鈴鹿郡能褒野古墳取調を命ぜらる 神祇省）

八年 上等御雇申し付けられ管内藥品鉞石属取調べを命ぜらる（三重県）

同年十月 内国勸業博覧会御用を命ぜられ 一志以南志摩全国天然人工物産取調べを命ぜらる（三重県）

備考）右伝記は三重郡教育会編纂三重郡郷賢伝による

付記 氏は本草学研究の傍ら天保年間より明治初年に至るまで殆ど五十有余年間付近の子弟 小山、西山、山田、堂ヶ山、下河内、青木の子弟常に三十名を下らず）を集めて読書算を教授せり。その間常に身体を以って率いしかば里間今にその徳を仰がざるなく、本草学者として氏を知らざるものあるも手習師匠としての氏を知らざるもの殆どなし。

## 十四 花祭り

一 昔も昔三千年 花咲き匂う春八日  
ひびき渡って一声は 天にも地にも我一人

四月の第二日曜が来ると山田の子供はこんな歌を歌いながら家を引くのである。  
花御堂が飾れている。

二 立派な国に生まれ出 富も位もありながら  
一人お城を抜け出でて 山にこもりし十二年

歌は楽隊と合わせられて愉快に聞こえて来る。

三 丸い世界の真ん中で 教えの門を打ち開き  
乾ける人にふりまいた 甘露の水は限りなき

象の背中の花御堂はゆれながら進んで行く。

四 何年たっても変わらずに 咲いたままなる法の花  
きれいな一つを胸に挿し 我らも負けずに励みます

お寺の御門も近づいてきた。手に手に卍の旗を振りかざして、行列は進む。

お寺は人出でいっぱいである。

花祭りは子供にも大人にもうれしい一日である。

十五 郷土の歌謡

子守唄

ねんねころいち竹馬与一 竹をそろえて舟につむ

舟につんだらどこまでいきやる 行くはたんぼの橋の下

ねんねねんねと寝る子はかわいい 起きて泣く子はつらくい

この子泣くので病が出たに 病なおしやれ元のように

こんな泣く子のように守せんに おひまおくれよだんなさん

この子なかもたれて寝たら 四国四国みなめぐろ

この子よう泣く全体よなく 乳が足らんか乳離れか

守よ子守りよ日暮れは大事 朝の寝起きはまだ大事

ねんねしなされまだ夜は明けぬ 明けやお寺の鐘が鳴る

ねんねんねんね泣くと 夜鷹がとつてぞねんねよいよ

ねんねしなされ今日二十五日 あすはおまえの宮参り

宮へまいったらなんと言うて拝む この子一代まめなように

雨は降る降る着物はぬれる かはい子は泣く日はくれる

泣いてくれるな泣かいでさへも 身より心がやつれるに

茶摘歌

お茶を摘むなら 根茶から摘みやれ 根茶は目きく 葉もたまる  
お茶師番頭さん 盲ならよかる お茶の小言が のてよかろう  
お茶は摘んでも 茶節は知らぬ こんで都で ふしならお

田植歌

五月五日に泣く子がほしや 畦に腰かけ乳のます  
田植するのもあまたの人の 命つなごと思いやこそ  
そろいましたぞ良いとんど酒が 二百二十日の出穂のよに

臼すり歌

臼よまわれよ どんどとまわれ 殿のよなべは 今宵ばか  
今年しや世がよて 穂に穂がさがり 路の子草も 米がなる

臼はよき臼 白子の浜の 杣の木の臼 音のよさ

盆踊りの歌

盆の十四日に踊らぬものは ごけかやもめか親なしか  
そろたそろた踊子がそろた 繻子の帯して浴衣きて  
踊るも阿保なら見るも阿保 同じ阿保なら踊らんせ  
踊り見に来て踊らぬものは かどが狭いか恥ずかしいか  
盆が来たとして何うれしかろ 赤いべはなし帯はなし  
踊子が来た来た庄屋どんの門へ しゅすの帯して浴衣きて

お伊勢まいり

伊勢は津でもつ 津は伊勢でもつ 尾張名古屋は城でもつ

お伊勢参りすりや 転熊はのこせ 朝熊かげでまたまいれ

坂はてるてる 鈴鹿はくもる おいの土山雨が降る

田舎そだちの薮鶯が はじめてお伊勢へ参詣して

一夜の宿もとりかねて あちらを向いても宿はなし

こちらを向いても宿はなし 梅の古木に宿をとり

つぼみ枕で花ぶとん 月星ながめてほけきよ読む

めでためだが三つ重なりて 鶴が御門に巢をかけて

十二の卵を産みそろえ それが雛にとかいわって

親子諸共立つ時にや 金の銚子に黄金の杯

小判さかなで飲むときは 恵比須大黒いやくをする

七福人が舞をする そこで連中が繁昌する



あとがき

父の書物を整理していたら、小山田郷土読本稿本」と表書のある冊子 不書きのつづり）が出てきた。ほぼ五十年ぶりに故郷である山田にもどり、住むようになった機会に冊子をひらき読んでみた。

なつかしい情景やら、昔のくらしぶりが彷彿と想いおこされ、しらずしらずに子供時代にひきもどされた。

昭和の初期、小山田尋常高等小学校に奉職（昭和四年三月から二十二年三月までしていた父・竹内 弘は、平和なくらしを願いつつ、元気で育ちざかりの児童に夢をいだき、子供らの副読本のつもりで田舎の情景やら歴史やらをまとめ、記したものと思われる。

ただその後戦時体制下の教育になり、日の目を見ることなくおくら入りにしていたものであろう。戦争もおわり六十年へて、世の中が随分変わったが田舎のよさはいつまでも変わることなくありたいものである。

なお、文章は原稿に忠実に清書したので、現在の表現とはかなり異なり読みにくいところもあるが一応まとめてみた。付属として、郷土史年表、神社、寺院についてもまとめられてあるが割愛した。

（竹内雅彰記）